日蓮宗

妙林山 行善寺

日像上人ゆかりの霊木「妙林柿」

境内には日像上人ゆかりの霊木、妙林柿があり、数百年の歴史を永劫に伝えています。

永仁二年（一二九四）の秋、日蓮聖人最後のお弟子・日像上人が北国を巡られたとき、当地にあった貧しい草庵に一夜の宿を求められました。

はやり病いで家族を亡くし一人で庵に住んでいた老婆は、明日のたくわえもないほどの貧しいくらしでしたので、庭の渋柿を焼いてお上人にお出ししました。

一夜が明け、お上人のみ教えに法華経の信心をかたく心に決めた老婆は、お弟子の一人にと申し出ました。

その願いを聞き入れたお上人は、老婆に「妙林尼」と名付け、夕べの焼け焦げた渋柿の種を掌に載せると「南無妙法蓮華経」と七度唱えて庭に蒔きました。

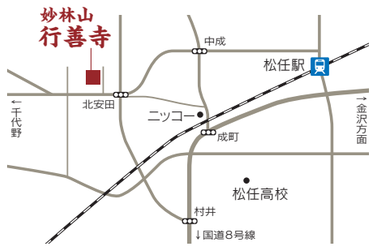
数日経ち不思議にも芽をだした柿木は、たくさんの実をつけるようになりました。この話を聞いた村の人たちは、誰言うとなくこの柿のことを「妙林柿」と呼ぶようになりました。

今でも地元の人は、このあたりを「妙林」と呼んでいます。

妙林柿

◎山号／妙林山
◎開山／応永25（1418）年
◎住職／第47世　雄谷 良成

〒924-0024　白山市北安田町546番地
電話：076-275-2240



泉 鏡花ゆかりの「摩耶夫人像」の寺

行善寺の由来と摩耶夫人像

日蓮宗妙林山行善寺は、日蓮聖人の孫弟子日像上人とその弟子妙林尼の開基、応永二十五（一四一八）年四月源海日海上人の開山による由緒ある名刹です。

本堂には仏母摩耶夫人像が安置されており、胎内には、釈迦生誕の秘仏がおさめられています。その秘仏はインドのビシュケマ（備首渇摩）王が刻ませたもので、インドから中国に伝わり、武帝が奉じ、後に百済に遠征した加藤清正公が持ち帰ったという故事来歴があります。以来、授子安産の道場として母から娘へ、またその子へと広く伝承されています。

幼くして母と死別した金沢生まれの明治の文豪・泉鏡花は、行善寺の摩耶夫人像を終生にわたり敬慕しました。鏡花の母、鈴は、明治十五（一八八二）年十二月、二十八歳の若さで亡くなりました。摩耶夫人は釈迦を産むとすぐに亡くなったとされますが、十歳で母を亡くした鏡花は行善寺の摩耶夫人像を見ることで強烈な印象を受け、母の面影を重ねました。

摩耶夫人像の胎内秘仏は毎年四月八日、十一月三日に御開帳され、多くの参詣者が訪れます。

泉 鏡花

明治の文豪・泉鏡花の母慕いの寺

明治四十四年の随筆『一景話題』で、鏡花は父に連れられ幼いときに訪ねた夫人像のことを回顧しています。

「十歳ばかりの頃なりけん、加賀國石川郡松任の駅より、畦路を半町ばかり小村に入込みたる片辺に、里寺あり、寺号は覚えず、摩耶夫人おわします。なき母をあこがれて、父とともに詣でしことあり。初夏の頃なりしよ。」

合歓の花が咲き、田には白鷺、麦は青く、桑の芽は萌黄に萌えていたとあり、さらに続きます。

「よし、それとても朧気ながら、彼処なる本堂と、向って右の方に唐戸一枚隔てたる夫人堂の大なる御廚子の裡に、綾の几帳の蔭なりし、（中略）浮べる眉、画ける唇、したたる露の御まなざし。瓔珞の珠の中にひとえに白き御胸を、来よとや幽に打寛ろげたまえる、気高く、優しく、かしこくも妙に美しき御姿、何時も、まのあたりに見参らす。」

鏡花の記憶の中で行善寺の摩耶夫人はあくまでも気高く、優しく、美しかったのです。

鏡花「美と幻想の世界」の発端

摩耶夫人像は、脇の下から我が子を生んだという伝説にのっとり、右の袖口からまさに釈迦牟尼が生まれる瞬間をかたどった彫像です。袖口が女性器の形容になっています。

妖しくも慈愛に満ちた究極の女性像であり、鏡花の「美と幻想の作品世界」に多大な影響を与えました。

『義血侠血』の水芸の女太夫「滝の白糸」。『夜叉ヶ池』の悲劇のヒロイン百合と荒ぶる龍神「白雪姫」。『外科室』に登場する伯爵夫人。『婦系図』の柳橋芸者、お蔦。

そして、名作『高野聖』で聖の煩悩を誘う妖艶の美女。そうしたすべてが摩耶夫人像のイメージから描かれた、と断言する研究者もいます。

加賀の千代女が歌仙二巻を奉納

行善寺は、「朝顔に つるべ取られて もらい水」の句で知られる「元禄五俳女」の一人、加賀の千代女ともゆかりがあります。享保十一（一七二六）年四月、二十四歳の千代女は金沢の浅野川近くに住む俳友の紫仙女を訪ね、「ほととぎす」を題に連歌の歌仙（三十六句）をはじめました。

「心見の声ぬれすきな ほととぎす」と紫仙女が発句し、次いで千代女が「わか葉のしずく宵のむらさめ」と続け、早いうちに歌仙が終わりました。

千代女はまた詠みたい気持ちがつのり、今度は千代女が発句で「何となき物のいさみや ほととぎす」と詠み、紫仙女は「曇らずてらず卯花の雲」と続け、この時、歌仙二巻をものにしました。

その歌仙二巻は、晩春に、摩耶夫人像を安置しているゆかりから行善寺に奉納されました。

千代女の句碑「何となき 物のいさみや ほととぎす」

久世光彦の小説『卑弥呼』にも登場

行善寺は、『寺内貫太郎一家』、『時間ですよ』で有名なテレビドラマ演出家、小説家であった久世光彦の小説『卑弥呼』（一九九七年／読売新聞社）にも登場します。

小説の主人公「ユウコ」は雑誌社に勤める若い女性編集者で、会社の同僚の「草加さん」、おばあちゃんという女三人連れで、北陸に取材旅行に出かけます。そこで行善寺を参拝し、摩耶夫人像を見て圧倒されるという場面が描かれています。

「金沢市から少し離れた松任の行善寺は、泉鏡花が堂内の《摩耶夫人像》を眺めに通ったので知られる日蓮宗の寺である。（略）

明治十七年、十一歳のとき、たまたま父親に連れられて行善寺にお詣りした鏡花は、お堂に祀られた女の像の前に立って、体の震えが止まらなくなった。その艶かしい女の表情に、亡き母の面影を見たのである。その日から、鏡花の行善寺通いが始まった。ある朝は微笑っているかのように見えた。」

摩耶夫人像は日本に四体しかなく、そのなかでも行善寺のものが一番有名です。